

最も熱活動が活発である A 火口，ドーム中腹の B 噴気地帯の噴気温度は，熱電対による直接測定でそれぞれ 500℃以上，300℃以上であり，高温状態を継続している。A 火口周辺では熱活動域の拡大がみられたことから平成 21 年 6 月から地温の連続観測を開始した。B 噴気地帯のガス分析結果は SO₂ 濃度の低下がみられるが，ほかの成分濃度はこれまでの変動の範囲内である。

山麓の河川水の水質分析結果では，温泉沢における成分濃度の減少傾向が続いている。

7. 5. 3 駒ヶ岳

(担当)：岡崎紀俊・荻野 激

駒ヶ岳の観測は平成 21 年 7 月および 10 月に実施した。主な結果は以下のとおりである。

昭和 4 年火口および 96 年南火口列での熱活動，火口原南側における地温連続記録，火口原をはさむ GPS 基線長，および山麓における湧水・温泉水の成分濃度のいずれも大きな変化はみられない。

7. 5. 4 十勝岳

(担当)：岡崎紀俊・村山泰司・田村 慎・柴田智郎

十勝岳の観測は平成 21 年 6 月，9 月および 10 月に実施した。主な結果は以下のとおりである。

平成 18 年秋頃から 62-II 火口周辺が膨張する地殻変動が継続しているが，熱活動には大きな変化はみられない。北海道大学および気象台などと合同で実施した繰返し全磁力観測の結果，表面的には穏やかに見えるものの 62-II 火口下浅部においては熱消磁が進行していることが明らかとなった。大正火口におけるガス分析結果では，ここ 2, 3 年は CO₂ と SO₂ の濃度がやや高めとなっている。

山麓の温泉および河川水の水質分析結果ではこれまでの傾向が続いているものの，富良野川の成分濃度はやや増加傾向がみられる。

7. 5. 5 雌阿寒岳

(担当)：岡崎紀俊・村山泰司・廣瀬 亘・石丸 聡・田村 慎

雌阿寒岳の観測は平成 21 年 4 月，6 月および 10 月に実施した。主な結果は以下のとおりである。

ポンマチネシリ山頂部で平成 20 年 11 月 28 日噴火の降灰調査を行ない，降灰(残留状況)分布を明らかにした。

ポンマチネシリ第 4 火口での地温連続観測では，前回の噴火以降熱活動に大きな変化はみられない。平成 18 年 3 月の噴火によって形成された北西噴気下部の噴気地帯が縮小する傾向がみられる。

ナカマチネシリ火口，山麓の野中温泉および湯の滝の水質分析結果では，湯の滝において成分濃度の微増傾向がみられる。